15.　気になる最近の避難事情

ここ 2, 3 年のコロナ禍で社会状況があらゆる場面で変化しつつあるように思えます。そんな中で、よく聞かれることに可能な限り自然災害時には在宅で身を守りたいという方が少なくありません。避難所までに行くこと、そのルートや時間帯、避難所で不便な中、気を使う面倒な生活をするよりも、自宅でそのまま過ごすための方法について提示してほしいということがあります。

確かに、災害が起きた時、起きそうな時に何が何でも避難所へというのは、人手不足とか不測の事態が発生するリスクもありますし、高齢化で思うような行動ができないという背景からも考えられるような気がします。

かといって、耐震化も完璧、土砂災害についても心配がない、豪雨災害でも何とか回避できるようなところに住んでいるという人は、そう多くないと思います。災害の形態が大きく変化している今では、だれでも、いつでも何らかの自然災害に遭遇するというリスクは高まってきています。そこで、在宅避難の場合、万全策ではありませんが、基本的には自分が住んでいる地域についてどのような災害が発生するのかについて理解しておくことが必要だと思います。それにはハザードマップ等で揺れやすさ、水害、液状化、土砂災害等について確認することが大事です。そして、機会があれば市民センターなどにお願いしてハザードマップについて、専門家からアドバイスをもらうことが大切なことだと思います。

過去に何の災害もなかったし、聞かないところで内水氾濫の被害をこうむったということを聞きます。それこそ、聞いていなかった、想定外だった、まさか起きるとは思っていなかったということになります。この在宅避難で大事なことはモノと情報ということになります。モノは、避難するにあたっての必需品ということで、水と食料品ということになります。日常から意識して日もちのするものをローリングストックする習慣を持つことが大事だと思います。情報は、事前に理解しておくべき地域知と発災の前後、発生時の適切な情報の入手が必要となります。ここで、適切な情報とは、信頼できる公共性のあるもので、自分に都合の良い情報だけの取得を避けるということが大切です。

しかし、地域防災ということからすれば、在宅よりも地域単位で助け合うという取り組みが望ましいし、災害に強い被害者ゼロを目指すには、地域コミュニテイは今こそ必要になっていると思います。いつでもだれでも災害弱者にもなるうるし、支援者にもなるわけで、在宅や地域防災を並行して交流を通じながら、災害時に助け合うことができる取り組みを真剣に考えていく必要があると思います。